

経済学の若干の基本問題

相 澤 秀 一

は し が き

昨年の十一月十六日に経済学部共同研究会が宇治の平等院の一室でもたれた。当日は生憎と冷たい雨の日であつたが、然しまた、しとしとと降る晩秋の雨にひときわ色を濃くした紅葉を窓外に眺め、火鉢に手をかざしつつ茶をのみながら和やかな半日を過ごしたことは格別の風情でもあつた。偶々当日の報告者として私が指名され、「私の辿ってきた学問歴」というようなテーマで話すよう要請されたが、もともと語るに足るような「学問歴」など持ち合わせていない私であるので、止むをえず此の日の学問的な懇談会の火付役でも演じようとの意味合で、かたんなら略歴を交えての研究歴を少しく語った。なおその際、当日の会合に少しでも研究会的な雰囲気をも醸したいと思つて、経済学に関して、日頃考え且つ問題としていたところのもの若干について、批判を仰ぎまた自らの研究を進めるための手段にと思つて、拙い見解を開陳した。それがどんな内容であり、またどんな風に話されたか、殆んど記憶に残っていないが、然し恐らくこんな内容のものを話したのではなからうか、仮りにいま改めて語るとすればこんなようなことを話すであらう、と思われることを書き綴らうとするのがこの小論の内容

である。取り上げる問題は断片的であつたにせよ、折にふれてすでに他の機会に論及したもののばかりで、何ら新奇なものではないが、要約的に焦点を絞つて整理しなおした形において、改めて私見を述べようと思う。取り上げた問題は、少くとも経済学の理論的研究の上において基本的な事項だと思われるが故に、敢て「経済学の若干の基本問題」という題名を付けたわけである。

一 経済学の課題と端緒

科学としての経済学の成立は古典派経済学とともに始まる。その根拠はもちろん、資本主義商品経済体制としての市民社会の生誕を前提とする。というのは、市民社会の成立とともに、経済はもはや、個人あるいは国家の意志をもつてしても、どうすることもできない実体である、ということが分つたからである。しかし古典派経済学は、ブルジョア社会を永遠不可侵な社会形態であると考え、それに囚われたため、その枠内から逃れ出て、それから超越して、このものを客観的・批判的に究明することができなかった。このことを為し得たのは言う迄もなくマルクス経済学である。だから彼のブルジョア社会の経済学的説明を任務とした経済学は同時に、ブルジョア経済学―古典派経済学の批判的形態において展開されたのである。マルクス経済学を貫く赤い一本の基本線は、『経済学批判』において自ら語る如く、唯物弁証法的な歴史観であり、この史観に立つてこそはじめて資本主義社会を超えて、これに囚われることなく、客観的・批判的に究明することができたのである。もちろん此の史観は、彼の経済学研究の導きの手となつたのであるが、同時にこの史観の基礎づけは、彼のブルジョア社会の経済学的究明によって与えられたものである。「人間の解剖は猿の解剖にたいする一つの鍵である」（『批判』・全集・

第十三卷・六三六頁)、という文言は、たんに歴史的根拠を示したのではなく、理論的根拠を示したものであつて、茲に史的唯物論の基礎づけが窺われる。

マルクス経済学の主要体系は『資本論』であるが、彼の対象として取り上げた現実在、そのかぎり彼の経験世界として表象し直観した研究の出発点は、一八六〇年代のイギリス資本主義であつた。かかる現実像を思惟の抽象力によって内的連関を辿りつつその本質を論理的に究明し、同時に歴史的現実の発展に即してその過程をも論理的に解明し、かくして得られた理論像或いは認識像が、取りもなおさず彼の経済学の理論体系となつたのである。此の場合もちろん、たとえ現実在が研究の出発点であるにせよ、その概念化への操作過程において、理論像を先き取りする意味において、現実の資本主義から一切の不純物、換言すれば非本質的な偶然的な諸要素のすべてを捨象して、純粹な資本主義像、あるいはいわゆる「理想的平均」における資本主義像たる理念像を設定することというまでもない。そのかぎり、その理論は抽象的な基礎的な資本主義の一般理論である。然しその理論は抽象的・一般的なものであるとしても、理念像自体が現実在からの抽象である点において、どこどこ迄もそれは、現実解明の一般的基础理論である。

『資本論』は産業資本主義段階のイギリス資本主義を取り上げ、それを一般化し純粹化して、理論的に究明し、ブルジョア社会の経済的運動法則を明らかにした理論体系である。彼が資本一般にかんする理論と言つた意味もそこにある。だが、資本一般の理論は、資本主義の生成・発展・没落の過程を解明せんとしたものであるかぎり、たんにそれは産業資本主義の段階に限定された経済学理論ではない。もちろん独占段階は彼の経験世界には届かない。然し、資本主義の運動法則を明らかにしたということは当然その理論のうちに、資本主義発展の辿るべき

過程が独占を必然することが理論的に予見されているところであって、現段階における資本主義分析の経済学は、『資本論』と次元を異にするものではない。『資本論』において究明された資本制生産様式の具有する内的法則の展開過程が現段階の資本主義の生成を将来させたのであって、たとえ現象的には外生的な諸条件が、現段階の資本主義を成立させたが如くに見えるとしても、まさにかかる外生的な諸条件の成立こそ、法則そのものの貫徹過程における具現的諸事象に他ならない。資本主義が一路純粋化の過程を辿るべきが経済の論理であるにも拘わらず、政治的その他の人為的作為によって、その純粋化過程が阻止されたとき、新しい資本主義の段階が到来するのであって、此の段階の究明は資本主義解明の一般的基礎的な原理論を以てしては処理しえられず、ここに段階論あるいは政策論としての原理論に対立する経済学部門が要請されるにいたるといふ主張には与みすることはできない。資本主義の純粋化過程という意味は、生産過程自体も商品形態を以て支配され、経済過程は独自の機構力によって自動的に調節を行ないつつ、自律的運動を産業資本として続けて行く過程の完成を意味するのであるが、この純粋化過程が阻害されるというところに、資本制蓄積に伴う資本制生産様式を貫徹する法則の内的矛盾の展開がみられるのであって、外生的諸条件あるいは政策とみられるものもまさにその具現事象に他ならない。独占の段階を体験して、この「資本主義の最新の段階」を、事実に且つ理論的に究明したレーニンの『帝國主義論』は、たんなる段階論や政策論ではなく、『資本論』に依拠して、独占資本主義の理論として発展させたものである。『資本論』の体系は、直接的生産過程の究明に始まり、次いで流通過程の分析、そして最後に総過程の解明、という風に、抽象から具体へ、簡単から複雑へ、一步一步上向の旅程を辿っている。マルクスの生存時期において彼が経験しえた経済社会の具体的諸事象は、彼がその経済学において取扱ったものにとどま

らない。国家の問題もあれば、外国貿易・世界市場の問題もある。いわゆるプラン問題として論議されるところに示される通りである。だからと言って『資本論』には、これらの問題にたいする理論的示唆は皆無であると論断することは誤りである。恐慌の具体的な系統的な解明は、世界市場の項において試みられるものであるにせよ、『資本論』体系に一貫して論究されている恐慌の理論を無視するならば、マルクス経済学を死物に化し、恐慌と革命の経済学たるの意義を失わせてしまう。⁽¹⁾ もともとプラン問題は、マルクス経済学の学史的⁽²⁾研究としての意義をもつものの、現行『資本論』が彼のプランからみて、どうであるか、などという問題意識に私は余り積極的意義をもたない。むしろプラン問題は、それぞれの部門経済学の専攻者にとつて、彼が若しも財政学者であるならば、そしてマルクス経済学者として自己の財政学を樹立せんとする場合、マルクス主義経済学において斯学はどのような位置づけが与えられ、従つてまたどの様な性格規定がなされるべきか、という問題意識においてのみ、その積極的意義が見出されるのである。

『資本論』はその研究対象に資本主義をおいた。その限り、いわゆる一般的に言われる歴史的⁽³⁾科学たる広義の経済学ではない。然しそれを簡単に、古典派経済学と同一視して、狭義の経済学であると言いつけることは、エンゲルスも指摘している通り誤まりである。殊には、資本主義体制は歴史の一過渡的な社会体制であり、始点と終点のある・それ自体完結せる体制であるが故に、資本主義解明の経済学は自己完結の体系でなければならぬ、との主張は、『資本論』を「閉ざされた体系」と看做す見地に通ずるものであつて誤まりである。飽く迄もそれは「開かれた体系」である・ブルジョア社会の経済的運動法則を明らかにして、資本制生産様式の生成・発展・没落の過程を究明することによつて、資本主義を本質的⁽⁴⁾且つ過程的⁽⁵⁾に理論的に把握解明することを任務としたマル

クス経済学は、その限り狭義の経済学であるが、同時に右の任務を遂行するためには当然にまた、前段階からの移行過程、さらに将来社会への展望の理論的説明を行なわざるをえないのであって、かかる意味合において、それは広義の経済学であり、「開かれた体系」でもあると主張したのである。エンゲルスは『反デューリング論』・第二篇・第一章において、歴史的、科学的としての広義の経済学に言及し、さらに「経済学の任務はむしろあらたにあらわれつつある社会的諸弊害をば、現在の生産様式の必然的結果として、しかも同時に、その生産様式のまぢかに迫っている分解の兆候として証明すること、そしてこの分解しつつある経済的運動形態の内部に将来のこれからの弊害を除去する生産と交換の新しい組織の諸要素をばくろすることにある」（全集・第二〇卷・一三九頁）、と説いて本来的な広義の経済学の必要性を主張し、「広義の経済学は、しかしこれから作りだされなければならぬ。こんにちまでわれわれが経済学によってえているものは、ほとんど専ら、資本制生産様式の発生と発展とにかざられている」（同上）のであって、それが古典派経済学の姿であり、彼らは、一方では積極的側面を論証し、他方ではその消極的側面からの批判を試みてはいるが、それは成功していない。そしてそれを成し遂げたのは広義の経済学を樹立したマルクスにおいてであった、というのがエンゲルスの評価である。結語にいう「ブルジョア経済学のこの批判を完全にやりとげるには、生産・交換・分配の資本主義的形態についての知識だけでは不十分であった。この形態に先行するか、またはこれと並行した、発達程度の低い諸国に今なお存続する諸形態もやはり、せめてあらましかけでも、研究され比較されなければならなかった。このような研究と比較とは、いままでのところ、だいたいのにおいて、ただマルクスだけがこれを行なったのであり、したがってまた、前ブルジョア理論経済学についてこんにちまで確定されたことも、ほとんど専らマルクスにおこなっているのである」（前

周知の如くマルクス経済学は、全社会構成体の土台を物質的生活諸関係の総和、いわゆる生産諸関係の総和たる経済の世界として把み、このものの理論的究明をとおして全社会構成体の変遷過程を法則的に解明把握しようとしたものである。そしてその世界が、唯物的な自然史的過程として展開されると見た。このところにまた彼の経済学研究が、史的唯物論の定礎づけを行なったという理由が見られるのである。

すでに述べてきた如く、マルクス経済学はブルジョア社会の経済的運動法則を把握すべく、ブルジョア的な物質的生活関係の総和たる全社会構成体の土台に分析のメスを入れたのである。その方法は、『経済学批判』の序説に詳しく、また『資本論』・第一巻の『後書』（一七頁）にも語っているところであって、いわゆる思惟の抽象力によって表象における現実在を分析下向して、たどりついた簡単な範疇から上向の過程を論理的に展開することによって敘述が行なわれ、経済学の体系が構築される、という科学的方法に依拠しているのであるが、彼はこの方法に立脚して、経済学の端緒に商品をおいた。「資本主義的生産様式が支配している諸社会の富は、一個の『老大な商品集積』として現われ、個々の商品は、その富の元素形態として現われる。それ故、われわれの研究は商品の分析を以て始まる」（三九頁）、という『資本論』冒頭の句が右の事情を物語っている。言うまでもなく資本主義生産は価値増殖の経済活動である。価値増殖は自立化した価値の存在を前提し、価値の自立化は貨幣において実存するのであり、貨幣の生成は商品の存在を前提する。かかる意味においても亦、商品は貨幣にたいし、さらに資本にたいして、最も抽象的な簡単な範疇である。形態的には商品を端緒としての、商品から貨幣、貨幣から資本へ、という展開は、抽象から具体へ、簡単から複雑へ、という論理の筋途を通るかぎり科学の方法

に即応する。然し経済学的究明は、形態の背後にある実体を常に考慮のうちにおかねばならない。端緒の商品は商品一般ではなく資本制商品である。すでにその内に、剰余価値が体现されている商品である。資本制生産様式の基本的生産関係たる資本（家）と賃労働（者）との関係がその中に宿されているのであって、まさに資本主義の分析は、商品形態を以て行なわれる剰余価値生産の秘密を科学的に暴露することを任務としているかぎり、先ず以て端緒の商品を右の如く規定して受け取らねばならぬ。資本制生産は、本来自由な自主的な主体的生活であるべき労働が、主体から疎外されて他人のための強制された労働となり、彼らに対立し、而かも労働の成果が彼らを支配し拘束して賃労働たらしめ、資本の価値増殖に奉仕させられているという点にあるのであって、この関係から必然に生成するプロレタリアの解放、従って人間の解放を旨とす労働者の意識が、かかる資本制体制を客観的に批判しうるのであり、此の見地に立つてのみ、商品分析の意義がある。もともと「所有とは、本源的には、労働（生産）する主体が、自分のものとしての、彼の生産または再生産の諸条件にたいしてもつ関係を意識する」（『資本主義的生産に先行する諸形態』・選集・第九卷・三五四頁）、ものであって、古く労働収益権の立場は之に通ずる。生産諸条件の直接的生産者からの分離、直接的生産者の賃労働者への顛落、そこに資本制生産様式が成立する。かくして端緒の商品のうちすでに資本制生産関係が宿されている。然しこのことの解明は、資本の解明を俟って始めて明らかにされる。かくして端緒商品は下向抽象されて商品一般形態には単純商品にまで分析されて、そこから上向の旅路を辿りつつ資本にまでいたり、そこにおいて、資本運動の根本たる直接的生産過程が分析され、ついで資本の流通運動形態として現象する流通過程の分析に入り、進んで資本運動の総過程としての具体的な諸経済形態の分析を行なって、階級に終る、という体系を以て、資本主義の一般的な基礎的な理論像を構築し

ているのが『資本論』であるが、まさにこの『諸階級』において思想的に具体化された・生産関係の体現物としての商品に終る、という形式をとっている。そしてこの資本制商品の消滅・止揚、より高次な社会形態への移行の根拠、の理論的展望を支点として、マルクス経済学の現代的意義があるのである。

(1) 杉原四郎・『マルクス思想体系の形成』(経済学史講座・②)・一九七―八頁。

二 基本的経済法則と価値法則

『戦争と平和』の「エピソード」においてトルストイは、人間の自由と歴史の法則とについて考察を試み、彼独自の歴史観を述べている。「もし各個人の意思が自由であったなら、すなわち各人がその欲するままに行動ができたとしたら、すべての歴史は、なんの連絡もない偶然の羅列にすぎないことになるであろう。たとえ百万人中ただ一人の人間が、それも一千年のあいだに一度でも、自由に行動する可能をもつ、つまりその欲するままに行動することができたとしたら、この人物の法則に反したただ一つの自由な行動は、明らかに、どんなものにして、全人類を支配する法則存在の可能を絶滅するものである。ところが、もしただ一つでも人々の行動を支配する法則があるとすれば、自由意志なるものはありえないことになる。なぜなら、人間の意志は、この法則に従わなければならないからである。この矛盾のうちこそ、意志の自由についての問題……が含まれているのである」(河出版・『世界文学全集』・第十三卷・四四四頁)、と設問し、人間を観察の対象として眺めれば、あらゆる存在物と同様に、当然に従わねばならない必然的法則の存在を認めるであろう。然しわれわれが意識主体として内部からこの法則を眺めれば、自分を自由なものと感じるであろう、と解答している。さらにまた、「もし一つで

も、人間の自由な行為があるとすれば、歴史的法則は一つとして存在しなくなり、歴史的事件に関する觀念も、一切存在しなくなるわけである。歴史のためには、人間の意志の動きの一線があり、その線の一端は未知数のうちに隠れ、他の一端において—空間と時間と、原因の支配のうちに—現在における人間の自由意識が動いている」（前掲書・四五二頁）、とも言っている。まさにわれわれ人間は意志主体・意欲主体として社会生活を営んでおり、各人は自主的に価値判断を行なって自らの意志の命ずるままの行動を行なっている筈である。にも拘らず、全体としての社会の歴史的発展は、個々人の意志や意図とは無関係に、独自の運動を展開している。然しそのことは、歴史成作の主体としての人間の意志が歴史の形成に全然関与しない、というのではなく、むしろ一つの集团的意志として、また集団的行為として歴史を造っているのであって、このところに、社会発展の歴史法則をいかに把握するかという問題が生ずる。生産力と生産関係との矛盾衝突を契機として、生産様式の交替として社会の歴史的発展過程を捉える史的唯物論の見解にたいして、これは人間の自由な社会体制選択の意志を抹殺してしまう決定論であり宿命論であって、もしかかると見解が容認されるならば、人間は何も為すことなく拱手して棚ぼた式に、新社会の到来をまてばいいではないかという批判的な異論すらみられる。かかる批判論は、人間不在の歴史観の告白にすぎない。社会の歴史過程を自然史的過程として捉えるということは、人間の世界を自然の世界に埋没させて、恰も人間をして映画の観賞者たるが如き立場に立たせて、うつし出される画面を眺めるにしか過ぎない者たらしめる、ということを意味するのではなく、人間自体が画面の成作にとつて重要な役割を演ずることを、その基礎において確認しての話である。問題は、個々の人間の意志的行動と歴史との関係である。

人間は孤立し個別化して生活するものではない。人間はつねに集団の一員として共同して生活を営んでいる。

この生活の営みこそ、歴史の前提である。「あらゆる人間歴史の第一の前提はいうまでもなく生きた人間の諸個体の現存である」(M・E・全集・第三卷・二〇頁)。従って人間の意志や行動は、集団的意志・行動としてあらわれる。この点においてのみ人間個々人の意志と行動とが、歴史の成作に参与するのである。言うまでもなく人間そのものの現存は、物質的生産および再生産を基礎におく。生産は社会的生産として行なわれ、社会的生産力として発現される。従って社会存続の基礎、それ故にまた社会発展の原動力は社会的生産力であり、主体的には生産力の担当者の活動である。かような生産力を育成し、それに照応する生産関係をつくりあげた集団は、同時に上部構造としての権力を掌握し、常に歴史における主体的な役割を演ずる。そして個人が、かかる集団にぞくずるかぎり、彼らの社会的存在によって規定された意識は、集団の意識と共通であり、集団の歴史行為を是認し推進させること必常であつて、これが歴史の必然であるならば、個々人の意志自由は歴史の必然と対抗するものではない。然しわれわれの社会が階級社会であり、直接的生産者階級と生産関係保持者たる支配階級とに分裂しているが故に、被支配階級の意志は暴力的に抑圧されて、支配集団の意志する方向に歴史が進むとしても、そのことは、やがては生産力と生産関係との矛盾衝突の政治過程における階級闘争として具現するのであつて、その行きつくところ生産様式の交替、社会の変革として、より高次の社会形態への移行を必然する。かかる歴史の必然法則は、人間の意志や行動を歴史成作の場面から抹殺することではなくて、まさにかかる歴史必然の法則の認識の上に立って、思想が、理論が、大衆を捉えたとき一つの強大な物質力となる、という言葉の示す如く、今や新たな集団が歴史成作の主体として登場する。このことは人間の意志の自由を少しも否定するものではない。そして搾取する者も搾取されるものも存在しない社会になったとき、労働の疎外、人間の疎外が止揚されて、真に人

間の解放が実現されたとき、人間の意志の自由と歴史の運行とは、全人類的に合致するであろう。

ところで、すでに述べきたった如く、全社会構成体の歴史的発展の基礎は、その土台たる、物質的生活諸関係あるいは生産諸関係の総和である経済の世界を貫く法則の支配にある。その意味において、生産力と生産関係との矛盾対抗において経済社会の交替・発展を把握した、史的唯物論にいうところの社会発展の歴史法則は一般的抽象的法則である。にも拘わらず、それが社会発展の必然的法則である点において、基本的法則である。かかる一般的な基本法則が、それぞれの段階におこる経済の世界に特殊化され具体化されることなくして、現実の歴史的発展はありえない。かように特殊化され具体化された法則が、それぞれの生産様式としての経済の世界における基本的経済法則である。資本制生産様式のもとにおける基本法則（マルクスは『資本論』で絶対的法則と呼んでいる）は、剰余価値の法則であり、第二次大戦後の全般的危機の第二段階の諸条件のもとで、これを特殊化させたのがスターリンの最大限利潤の法則である。それが基本的経済法則であるということは、資本主義発展過程の全側面を支配し規制しているからである。まさにこの法則によって個別資本相互の競争を必然し、生産力を増大させ、さらには生産・資本の集積・集中を結果させたのである。この法則は資本主義という体制であるかぎり不可避的な強行力をもつものではあるが、そのことは同時に、また、資本の人格化としての、かかる体制の保持温存を意図する階級によって、強力に推進されるものである、という点を見落してはならない。従って、この法則の貫徹過程は資本家階級による諸々の経済政策の具体化として現象する。そのかぎりにおいてまた、かかる政策の遂行にたいして反抗する階級勢力の発生を必然し、かくしてそれは階級闘争の法則に転化する。

ところで、かくの如き基本的経済法則によって、その発展過程の運動を行なう資本主義が、その運動する地盤

が商品生産社会であるかぎりにおいて、商品の運動を支配する法則から免れることはできない。経済とは生産と消費との社会的秩序であるといわれるが、正に社会の総需要に適應した生産が行なわれねばならず、それ自体、人間関係が商品関係として現象している無政府的な生産体制のもとでは、生産活動の各種生産部門への配分が、体制内部の機構力によって行なわれねばならない。かような機構力こそが価値法則である。資本制商品のもとにおける生産価格法則は、価値法則の具体化であり、労働の生産物が資本の生産物になった段階における当然の帰結である。さらに独占段階にあつては、平均利潤の法則は全面的に作用しなくなり、そのかぎり生産価格法則は消滅したかの如き觀を呈するが、独占資本はいかに強大な独占力を以てしても、商品流通を支配する価値法則を止揚することはできない。若しそれが可能ならば、商品経済の否定であり、生産の無政府性の止揚であり、組織された資本主義、超帝国主義、という修正理論に通ずる。その故に、私は価値法則は、資本主義が商品生産の経済体制であるかぎり、その再生産過程を規制する基礎的法則である、と主張したい。梯教授はその著『資本論への私の歩み』において、「この学的体系のこのような形式をみたます内容は、とうぜんながら、人間労働が資本制社会において自己疎外におちいつているという思想であるが、これはヘーゲルの疎外の論理の具体化であり、これの経済学的表現は、剰余価値の法則である。この点で、スターリンが近代資本制社会の基本法則は剰余価値の法則であるとしたことは、しごく当然のことである。にも拘わらず、このいわゆる『スターリン論文』が、日本のマルクス主義経済学界に衝撃をあたえており、それだけでなく、さらに価値法則が『資本論』固有の研究対象であるとみなす方法論的に呑気な『資本論』研究者のいまだに在ることなどは、日本の経済学界が一般に、『資本論』の学的体系に無関心であったことの反証といえるであろう」（二四二頁）、と述べているが、若干の不正確

な文言の使用は問わないとして、前段には異論ないとしても、後段は承服しかねる。教授からみれば私もまた呑気な『資本論』研究者であるのかも知れないが、教授のかかる見解の基礎には、同君の経済学における価値論・価値法則についての無理解があると考えられる。

そもそも如何なる形態の社会にせよ、その社会が存続して行くためには、物質的生産および再生産として把まれた経済の客観過程がつつがなく展開されねばならない。かかる再生産過程が資本制生産のもとでは、社会的総資本の再生産過程としてあらわれ、且つその過程は商品生産の形態において行なわれている。言うまでもなく、商品経済にあつては、相互依存の關係にある人間の社会生活が、商品關係として現われるが故に、この商品關係を規制して、物質的生活諸關係を秩序づけ、経済の再生産過程を展開させて行くところに、価値法則の意義があるのである。A・スミスが「見えざる神の手」と呼んだものがこれであり、商品生産社会の秩序づけを行なう自己調節の能力こそが価値法則に他ならない。『資本論』が究明把握の目標においた、ブルジョア社会の経済的運動法則は、もちろん、ひとり価値法則を考慮しての発言でないことは言うまでもないが、然しこの基礎的な法則を無視して経済的運動法則を説明することはできない。労働の疎外、労働の収奪、は資本主義に特有のものではない。一労働日が全部必要労働から成るといふ事情のもとでは、剰余労働も存在しないが、いやしくも労働生産性の高まりにつれて一労働日が必要労働と剰余労働とから成るにいたり、かくして此の剰余労働が労働主体以外の人間によって支配占取される時、労働の収奪が起る。かかる事態が、資本主義のもとにおいては、労働力もまた商品となり、従つて生産過程そのものも商品形態を以て行なわれるにいたり、そのかぎり、商品生産をとおしての剰余価値の生産が目的となされたのである。剰余価値の法則が基本的経済法則と言われる根拠がここに

ある。だが、剰余価値の生産は資本の直接的生産過程で行なわれても、その実現は商品流通の場面においてである。この実現を保障するものは何者か？つつがなく、円滑に、再生産過程が進行するところに保障される。そして此の場面こそ、繰りかえし述べてきた価値法則の支配するところである。もとより、価値法則が支配しているということは、経済過程が円滑に進行する、あるいは進行すべきである、ということの意味するのではなく、生産の無政府性をその本質とする資本制商品経済の過程はたえず秩序的過程の軌道から逸脱せんとする傾向を内蔵している。にもかかわらず、その逸脱が、資本の価値破壊その他の暴力的手段によって再び秩序的軌道へ立ち戻される、という過程が繰りかえされる、というところにこそ価値法則貫徹の論証根拠がみられる。そしてまさに、資本の蓄積、資本主義の発展、という運動過程を推進させる剰余価値法則と価値法則との絡み合いにおいて、諸々の経済現象を生起させつつ、資本主義はその運命を辿って行くのである。資本制蓄積の一般的法則の展開といわれるのも、このことに他ならない。

資本制生産は労働力の商品化を不可欠な前提とする。資本の再生産は商品労働力の再生産を不可欠とする。賃金として支出された貨幣は可変資本であっても、労働者が生活資料の購入に支出する賃金所得は消費元本であって、資本ではない。従って、労働者が工場で働く過程は生産資本としての機能過程であっても、家庭での彼の生活はたんなる私的生活であって、資本運動ではない。だが、その家庭的な私的生活こそ、資本の必要とする労働力再生産のために必要不可欠な生活領域である。であるとすれば、主観的には自由な自主的な労働者の私的な家庭生活も、資本運動の一環として、その中に巻きこまれているのであり、そこにおいてこそ、完全な労働の疎外人間の非人間化、が起こっているのである。かかる現実の上に立ってはじめて剰余価値法則が基本的法則たりう

る根拠が見出される。だが同時にこの剰余価値法則に起動づけられて進展する資本制蓄積は、労働者階級を主軸とした一般大衆の生活破壊をもたらし、不断に増大をつづける生産力とそれに対応すべき消費力とのギャップを益々大ならしめ、自動的調節力による再生産過程の進行を困難ならしめる。このことは価値法則の作用停止を意味するものではなく、剰余価値法則の支配にもとづく資本制蓄積の過程に、価値法則が強力に作用し貫徹している事態以外の何者でもない。『資本論』・第三卷・第三篇の第十三・十四・十五章においてマルクスは、利潤率低下傾向の法則を論述し、第十五章を、この法則の内的矛盾の展開の解明にあてている。すでに第一卷・第七篇・第二十三章において、資本制蓄積の一般法則を、さらにそれへの補論として第二十四章・第七節において、その歴史的傾向を解明しているが、ここではもっぱら資本の直接生産過程分析の視点に立つての考察、換言すれば、剰余価値の源泉を剰余労働に求め、可変資本という概念を明確にし、不変資本と可変資本との構成比率が、蓄積過程で受け取る変化を明らかにし、特に生産力の担当者階級に及ぼす影響を重視しつつ、すすんで、それが資本主義体制のもつ矛盾と絡み合って発現する諸事象を究明したのであるが、第三卷での上記論述の取り上げ視点は、剰余価値の具体的形態たる利潤の考察を前提して、いわゆる資本制生産の総過程に分析視点を置いて、第一巻で把握した一般法則をさらに一段と具体的な諸形態において捉え解明を試みたものである。利潤率の低下傾向もまた資本制生産様式の具有する運動法則の内的矛盾の表出以外の何者でもない。恐慌もまた内的諸矛盾の基本的側面の具現事象である。これら諸事象の発現場面は商品運動の場面である、というところに、価値法則が基礎法則である、という私の主張根拠があるのである。

三 経済学と価値論

ロビソンの生活でないかぎり、人間生活は社会的共同生活であり、人間の個体の現存にとって不可欠な物質的生活資料の配慮は、孤立的に行なわれるのではなく、自給自足の経済生活は考えられない。生産は常に社会的なものとして行なわれ、成員各々は必ずその一翼を担うている。このところに、「各人は万人のために、万人は各人のために」、という相互依存の関係が生みだされる。かくして、各個人はいづれかの種類の生産点に立って、公共的な役割を果している。然しこの関係は、統制化され計画化された社会でないかぎり、直接に個人々の意識にのぼらない。蓋し、私有財産制を基礎において、その上に発生した自然発生的な社会的分業を建て前としている社会では、個々人の私的生産活動はそのまま直接に社会的生産活動とはならず、迂廻過程をとおって、そのことが実証されるに過ぎない。かかる迂廻過程こそ人間関係の事物化を前提とするのであって、彼らの生産活動の成果が相互に関係し合うことよって成立する。この過程が生産物の商品化であり、商品とは相互に交換関係におかれた生産物の受け取る形態規定である。商品の交換関係を通して彼らの生産物が社会の何人かにとっての使用価値であることが実証され、彼らの私的労働（生産活動）がはじめて社会的労働（生産活動）たるの事実を示すのであって、このところにおいて始めて各人は、彼らの私的生産活動の公的意義を確認するのである。経済生活の社会的形態が商品経済であるところに、先ず以て商品交換の秩序づけが行なわれ、ついで生産の秩序づけが結果され、経済生活の秩序づけがなされる。かような秩序づけを司るものこそ、自然経済の体制内に具有されている機構力に他ならず、いうところの価値法則である。敢てマルクスのクーゲルマン宛の手紙を引用す

るまでもなく、かかる価値法則の理論的解明は経済学の主要課題の一つである。

価値法則の作用形態は、先ず商品の交換比率すなわち交換価値を規定し、生産さるべき商品の種類および分量を定め、かくして最後に、労働力の各種生産部門への配分を行なう、という姿をとる。人間世界の疎外現象は実に自然発生的な社会的分業にその基礎をおくものであり、商品生産経済においてそれが具体化され、資本制商品生産経済にいたって完成する。労働の疎外化はこのところにおいて最高度となる。かくして理論的規定における単純商品社会を貫く価値法則が、此の段階においては、生産価格法則に転化すること、すでにこの小論で論述し来たが如く、当然の帰結である。かかる価値法則の解明のための理論的武器がいわゆる価値論であり、人間の物的生活関係としての社会が労働の有機的組織体であることを確認すれば、価値論は当然に労働価値論でなければならぬ。価値論が経済学においてもつ意義もこのところに見出される。

近代経済学にとっては、価値の現象形態たる価格についての理論があつても価値論はない。彼らは、相対価値——いうまでもなく商品の交換比率であり、貨幣でのそれは価格である——のみを問題とし、価値実体を究明せんとする立場を排斥し、リカードが絶対価値を取り上げたのは邪道であり、殊にマルクスの哲学的臭気をつけた価値論にいたっては形而上学的な論議であると嘲笑する。盖し彼らは、流通経済すなわち市場経済こそ神聖不可侵な経済機構であり、需給関係によって価格が定まり、それを通して社会的生産の調節が行なわれる姿こそが、最も民主的な経済生活の在り方であると考へる。経済分析はマイクロ的には価格分析に集中される。そして此の場合、貨幣はただ標準的な価値単位として、価格表示の材料であるに過ぎない。従つて価値実体の把握を基礎においての価値形態の論理的展開が貨幣形態にまで發展し、かくして貨幣もまた商品であり、而かも特殊な商品である、

との認識に立つての貨幣本質論など関心の外におかれている。ここからしては、労働疎外の認識はもちろんのこと、資本制生産様式の特異性の理解もなく、価格決定論はただ循環論的に堂々めぐりする生産価格論を支点としているに過ぎない。

労働価値論は古く素朴な形ながらW・ペティの説いたところであるが、少々学問的な形態をとるにいたったのは古典学派、A・スミス、D・リカードにおいてである。周知の如く、スミスはその分析対象たる経済社会を商品社会と規定し、そこでの生産物たる国富をマルクスと同様に商品の一大集積として捉えたのであるが、然しその商品把握は使用価値視点において行なわれ、価値視点が見失われた。それにも拘わらず、使用価値視点で捉えられた商品がその価値において国民所得に解消されると看做し、ついに生産物価値と価値生産物とを同視するという誤まれるドクマに陥った。この点、ケインズが社会的総生産物の価格から使用者費用を企業間相互の取引として控除し、これを要素費用に分解させてしまったのと同様、二部門分割の上に立った再生産の理論的分析を不可能ならしめた。『諸国民の富』冒頭の文言は、労働こそが国富の根元であることを正当に認めたという点、このことがたとえ誤まれるドクマを引き出したにせよ、労働価値論の原型を形成する。ところで、労働が価値の主体であることから、商品価値の規定が理論づけられたとしても、労働もまた賃金という価格をもつかぎり、労働の価値規定を前提せずしては、商品価値―彼にとっては自然価格である―の規定は解明されない。而かも資本ストックの所有、土地の所有、が制度化されて、利潤や賃金が労働の生産した価値からの控除として現われるならば、彼の素朴な投下労働価値論は、労働の商品化を前提しては合理的に説明することができない。かくてスミスは投下労働価値説を放棄して支配労働価値説を主張するにいたり、二元論的な価値論の中をさまよるにいたっ

た。資本制生産が剰余価値の生産を根本目的とする経済の体制であるかぎり、資本主義分析の経済学は先ずして資本の直接的生産過程に分析のメスを入れて、剰余価値生成の根拠を理論的に明らかにしなければならぬ。まさにこの事業を科学的に大成させたのはマルクスの功績であり、それは労働力という概念を創造したからである。尤も初期のマルクスにあっては労働と労働力の区別が正しくなされてはいなかったが、彼の学的研究の進展は、労働力を労働との区別において正しく概念した。労働は価値の実体であってもそれ自体価値をもたない。生産物が商品という形態規定を受けて価値となったとき、その価値の実体が労働であることから、商品価値の量的規定は商品に対象化された労働の分量による、という正しい理論を導きだし、労働力もまた、その再生産に必要とされる生活資料の生産が一定分量の労働を必要とすることから価値量をもった商品たることを結論づけ、かくして、労働力の使用消費の過程が労働であることの上に立って、剰余価値生成の根拠を明らかにしたのである。商品に含まれている労働の二重性、さらには、一方においては生産設備・原材料などにすでに具有されている価値を新生産物に移転させるといふ機能、他方においては労働の対象化が価値創造であることから、新生産物に新たな価値を付加する、換言すれば新価値を生産するといふ機能―いわゆる労働機能の二重性を明確にした、ということこそマルクス経済学における価値論の科学的な大成である。

以上みてきた如く、価値論は商品経済を基礎におく経済社会の分析において、価値法則理解の基礎として経済学上重要な位置を占め、また大きな意義をもっていると同時に、資本制商品生産社会の分析において、殊には剰余価値生産の秘密を暴露し、資本制生産様式の本質を解明するにあたって、不可欠な理論的武器である。この一見して、現実分析とは迂遠にみえる価値論を放棄するならば、剰余価値率を付加価値の資本および労働への分配

率と同一視したり、あるいはまた、資本係数および労働・資本比率を資本の有機的構成と類似視したりして、労働疎外の基本的事態を見失い、かくして正しい科学的な資本主義分析の経済学の性格を消滅させることとなる。尤もかかる見解にたいして、今日の経済事象がすべて数量化された世界として発現されているときにおいて、マルクス経済学は、たとえ資本主義の運動過程を基礎的一般的な理論として法則的に把みえたとしても、そこから一步下位の次元において、現実アプローチの現代的な経済学の課題に答ええないではないか、という批判も見受けられる。この点、マルクス経済学者に弱みがある。そのため却って早急に、高次の抽象的理論段階においてマルクスの構築した再生産表式論をそのまま無媒介的に現実の経済過程分析の手段・方法たらしめようとする試みもみられるが、これは危険であるのみならず正しい手続きとは考えがたい。これらの弱点は、マルクス経済学のもつ弱点ではなく、マルクス経済学のもつ弱点である。教条主義、修正主義、はその弱点の発現形態である。マルクス経済学が真に科学的な資本主義解明の基礎理論であると確認する限りにおいて、その理論を基礎においてこそ、もろもろの具体的な経済現象の数量的な、近代経済的分析の背後にある実体を把握しうるのであり、そのことによって、現段階の資本主義の理論的把握も可能となるのである。もちろんこのことは、『資本論』の一言一句を金科玉条視しての文言解釈的なマルクス理論の固執を意味するのではなく、理論の発展は現実の発展に即応することはマルクス主義の主張するところでもある以上、マルクス経済学の対象規定、方法論、に立脚して、彼の理論を具体化させ、発展させる、ところに経済学を研究する者にとっての課題と任務がおわされている。

〔追記〕

河上先生のこと

さきに「はしがき」に書いたように、当日の会合で、河上先生のことについて何か話されたい、との要請があった。河上先生に関しては、先生自らの手になる『自叙伝』に詳しく、また先生と何程かの関係のあった方々がこれまで沢山筆にされているので、いまさら私如きが付言する何者もないのであるが、私事にかかわる嫌があるが、先生の知られざる一面を語ると共に、なお先生が学者・研究者としての在り方、心構え、について示し下さったお訓しがあるので、それをも加えて、若干申し上げることにする。

私が昭和十六年の一月末に山口高商に赴任する迄の約数ヶ月、毎週土曜日の午後一時頃から、当時私は藤沢市に住んでいたもので、東京駅発の最終列車に間に合う時間まで、東中野の閉戸荘を訪れ、文字通り心の窓を開け放しては語り、語ってはザル碁の石を握っては、お互い同士あっぱれ呉・木谷の両雄気取りで心の和む楽しい時を、雑談と碁のなかで過ごした。先生の碁はなかなか気性の激しいものであって、初歩者に有り勝な、そしてまた私も同様だが、自分の石が眼につかず、相手の石ばかりが気になって攻めより他に考えないという有様であった。そのくせ、「どこかの国の軍隊ではないが、線と点の勝ちいくさで、中実はからっぽだね」、など冗談口をたたかれたりした。なかなかの敗けず嫌いで、いつぞや、「さんざんな目に合わせましたね」とからかいのハガキを差しあげたら、「過日は私が碁に負けたものだから、大分鼻息が荒いやうですが、さういつまでも勝負に執着しているのは、私からいうと碁道の本質ではありません。誰かの談に、勝っても快、負てもまた快という意味のもの

があり、何某という碁の専門家がそれを批評して、負けてもおもしろいというような気分では本当の碁打にはなれぬといっていました。私は感心しません。ここへ打ったら出入十何目の得となり、あちらへ打つと正味何目の地が出来るなど、錙銖の計算ばかりするのでは、商人も同じです。鬭争自体に興味がありまた打方に自らなる風格を出さねば、士人の碁にならず、ダメをつめる頃になって石を切ったりして得意になっているのでは、勝つても駄目でせう。聊か負け惜みのために碁道の精神を主張すること件の如し、御一笑下さい、という手紙をいただいたこともあるが、河上、相澤の両雄の碁は碁道の神髓をいったものであったかどうか、知る人ぞ知るである。先生との碁と雑談のひとつきは、私にとっても実に楽しい時間の流れではあったが、先生にも楽しかったことと思ひ、そのかぎり先生をお慰めできたものと思つてゐる。私が山口に去つた年の春、次ぎの一詩をいただいたのも、それを証するものと解している次第である。

春來無客到 棋局自生塵

君去風流絶 閑居空戀人

山口高商に赴任することになったのは、私事にかかわることで恐縮だが、当時の山口高商、岡本一郎校長が、和歌山高商を去られた宮川 実氏を懇請されたのだが、同氏の事情が応諾されることを許さなかつたので、私が代りに行くことを要請され、私の応諾となり、同氏の推薦によつて赴任することとなつたのである。呑気者の且つ世習にうとい私は、赴任し正式に任官したが、先生にも、宮川氏にも格別の挨拶をしなかつたらしい。その頃の先生からのお手紙に、「いつかお葉書を頂いて御任官の事を承知いたした折、宮川氏へ只だ漠然たる葉書を出されているだけでは頗る不十分ゆえ、官等俸給等の事も書かれて、一応の謝意を表されて然るべくと思ひ、その

事を申し上げんと存じ乍ら、相怠りて今日に及びました。新聞紙にて御承知の通り、大臣などに親任された者は宮家などにも残らず御礼廻りして居りますが、新聞にこそ出され、推薦者に対して直ぐに礼廻りして居ることは勿論であります、之は日本での社会的常識で、大兄の場合ならば第一に校長の宅へ礼に参られねばならぬのですが、事によると、それも気付かずに居られるのではないかと存じます。以上婆心より申上げ試みる次第、不悪お酌取り下さい」とあるが、まさしく先生の推察どおり岡本校長宅へ挨拶などには参っておりません。かような配慮を先生にかけたということは、いかに世間知らずとは言え、私の恥であるが、他面、弟子にたいしてこのようにまで配慮し下さった先生の慈愛あふれる温情にたいし、勿体ないくらい有りがたく思っている次第であり、かかる恩師を持ちえた幸福をしみじみ感じている次第である。その先生が、時局も多端ならんとするとき、世上輕薄な学者の動向を見られての故か、学者・研究者として堅持すべき生き方について賜わった訓しこそ、私の終生の生活指針としているものであるが、それを披露することによって、同じく学者・研究者としての生活を送っている同僚諸君への参考たらんことを期待している。

河上先生の辿って来られた思想遍歴の過程は紆余曲折の道程であって、表面的には無節操ともみられるかも知れないが、然しそれは、先生の「眞実を求める柔軟な態度」の故であって、而かも「眞実を求める」目的は「人間を愛する」が故に他ならなかったのである。先生が偉大な大学教授であったとともに秀れた教育者であったこともここに由来する。「人間を愛する」が故にこそヒューマニストでもあった。

眞実を求めて止まぬ心情は、自己への批判には謙虚に耳を貸し、誤ちを認めれば大胆卒直に自己批判を行なつて、ひたすらに、眞実追求の道を一步一步と前進されたのであって、その行きついたところ、ヒューマニスト河

上をマルキスト河上に転化させたのである。学問の研究は、売名や、立身出世のために行なわれてはならない。先生の私への教訓というのは、昭和十六年七月二十七日付の手紙に同封されていた、野紙に墨字で一行ずつにして書かれた詩である。第一句の薄は、遺稿では萍となつてゐるが、同義である。昭和十六年夏七月十六日の作である。

宛如薄在水

從風西又東

是此鄙夫事

學者那得同

丈夫苟志學

指心誓蒼穹

惟要一無愧

何必問窮通

困隳膏騰老

耳聾心未聾

寄語世上輕薄子

莫擬瞞此避世翁

ふたたびあわただしくなりつつある昨今の世相、じっくりと味読するに値いする尊い教訓であると確信してゐる。
(六六・一・二〇)